

原子力の仕事をする女性の視点・ 立場から考える福島事故と復興

福島第一原子力発電所の事故から約9か月。原子力の仕事をする女性たちで構成されるWin-Japanのメンバーたちは福島事故をどう受け止めたのか。また事故後にどのような取り組みに携わってきたのか。同メンバーの中から5名が集まっていたいただき、事故収束、福島復興への思いを込めた、熱く、真摯な話をお聞きした(編集部)。

座談会出席者(匿名)
Win-Japan 会員

- ・メーカー広報担当者
- ・システム会社主任技師
- ・大学研究員
- ・プランナー・講師
- ・メーカー技師

発生直後に福島事故をどう受け止めたか

初めの数日間はテレビの報道から情報収集

——福島第一原子力発電所(以降、福島第一)の事故直後からこれまでを振り返っていただきたいと思えます。まず、当時の事故をどう受け止めましたか。

WINの組織と活動



WIN Women in Nuclear) は、原子力放射線利用の仕事に携

わる女性の国際的なネットワーク。原子力平和利用推進の立場から、女性と次世代層を主な対象として原子力理解活動を行うことを目的としている。この目的のために、WIN会員は、原子力発電や放射線利用に関する研究成果、技術向上などについて情報交換し、会員の資質を高めることにより、より高い成果を上げることが目指している。

組織としては、Win-Globaerが1999年にヨーロッパで誕生し、国別組織の代表で構成される理事会を置き、会員75か国約2000名を擁している。Win-Japanは、Win-Globaerの

日本組織として2000年に設立された。会員数は現在、約200名。

Win-Globaerでは、原子力放射線利用について、女性や次世代層を重点対象とした一般国民への理解促進活動の他、原子力放射線利用分野の女性の能力向上および活用促進を目指す活動を行っている。具体的には、毎年、年次大会を開催し、研究成果、新技術、広報活動、施設見学会などを通じて、情報交換、人脈交流を行っている。また、エネルギー、原子力関連の国際会議において、WINとして、論文発表、ポスター参加により、原子力の情報を伝える活動を行っている。Win-Japanは、Win-Globaerの精神を受け入れ、日本の国情に合った原子力理解促進活動や会員の資質向上に努めている。とくに、原子力の立地地域で実施する女性交流会は、一般の女性と原子力放射線利用分野で働くWin-Japan会員との直接対話による章の根活動である。Win-Japanパンフレットの採録(

プランナー・講師(以下、講師) 初め

の数日間は、現地の状況がよく掴めず、情報を得るためにはテレビを見るしかありませんでした。テレビの画面で身につまされたのは、災害対策本部の状況です。私はかつて原子力防災の業務に携わった経験があります。テレビの中の災害対策本部の人の動きは、私が訓練の際に見ていた光景そのものでした。しかし、現場では実際に事故が起きている。その現実には怖ろしさを感じました。また、被災者でありながらも復旧業務にあたっている福島の同胞たちの心情を察すると、やりきれない思いでした。

日本の原子力発電所でこのような重大事故が起こることなど、この業界の誰が予見していたでしょうか。事故を前にして、いかに自分は無力なのかを思い知り、前途にまったく見通し

が立てられない初めの数日間でした。
職場の勉強会で追究した事象が
現実に

システム会社主任技師(以下、主任技師)

震災当日、私は東京のオフィス
でテレビやインターネットで震災関
連の情報検索をしながら一夜を明か
しました。地震直後に必ず心配にな
るのが、福島と新潟の原子力プラ
ントの状況です。今回も気になって真
先に情報を探ったのですが、テレビ
もインターネットも津波報道がほと
んどでした。しかし、日の暮れた頃
からでしょうか、少しずつ断片的に
情報が入ってきた。さらに、夜半近
くになると、かなり深刻な状況であ
ることが報じられ始めました。それ
以降、朝まで一睡もせず、原子力関
連情報ばかり追っていました。
いまから考えれば因果なことでは

自分自身の中で原子力に対する 考えが方向転換

大学研究員(以下、研究員) 震災直
後、私は事故の収束を楽観視してい
ました。4歳と2歳(いずれも当時)
の子に津波や地震の被災状況が繰り
返される映像は見せたくないとテレ
ビを点けていなかったのですが、状況の
把握も悪かったと思います。日本の
原子力に対する、今となっては「過
信」ともいえる思いもありました。
TMIでも3日、チェルノブイリでも
一週間で事故は収束に向かったのだ
から、福島でもそう遠くないうちに
収まるだろうと想像していました。

ところがその後の事故の進展は私
の想像とは異なりました。加えて、
マスメディアに登場した方、あるいは
身近の原子力関係者の中に、この事
故に対して私とは異なる認識や考え

が、実は、昨年度から職場で「原子
力発電所の安全概念」の勉強会を始
めていました。目的は原子力プラ
ントの設計を「深層防護」の観点から
深く追究していく試みにありまし
た。「深層防護」の鍵は、既成の安
全概念を否定するところから始まり
ます。それによって、プラントの機
能が一部損失しても、プラント全体
の健全性に影響を与えない設計を追
究していくのです。ですから、勉強
会では、あつてはならない事象を幾
つも想定しながら議論を進めまし
た。そして、自分たちの議論の成果
は、次の安全対策に必ず反映するつ
もりで取り組みました。それだけに、福
島の事故に対しては悔しい気持ちで
一杯です。

悔やまれる既設炉に反映できな かった安全設計

方をお持ちの方が少なくないことに
も気づきました。たとえば、事故直
後に「千年に一度の自然災害だから」
という話が出ましたが、原子力プラ
ントを計画から廃炉まで時間軸で見
るとざっくり百年です。百年を1単
位とすれば「千年に一度の自然災害」
の発生確率は1割にもなるではあり
ませんか。それらを通じ、私自身
の中で原子力に対して今までになか
つた迷いが生じました。

いままで「原子力村」と言われて
も、他の業界も大同小異だと思っ
ていましたが、再度、この「原子力
村」についても考えなければならな
いと感じました。今回、原子力とい
う技術の事故によって、多くの人の
生活を奪ってしまうのを実際に目の
当たりにしたわけです。今の私は、
日本が、あるいは世界が今後も原子
力という技術を安全に管理できる人

メーカー技師(以下、技師) 地震直
後は震源地が「宮城県沖」と聞いた
ので、咄嗟に女川原子力発電所の状
況を心配しました。22時頃に「福島
第一で全交流電源喪失らしい」との
情報を得た時には、しばらく次の言
葉が見つかりませんでした。

福島第一の結果を見ると、プラ
ントの防護思想のどこかに「ここま
でやれば万全」といった線引きがあ
つたようにも思われます。私は、原
子力プラント設計の技師として、震
災の日も次世代炉の概念設計を担
当していました。長時間の全交流電
源喪失にも耐えるための新たな設計
も行っていたのです。しかし、それ
は次世代炉を対象にした設計であり、
なぜ即座に既設炉に反映できなかった
のかと思うことしきりです。時計
の針は戻せないだけに、残念で悔や
まれます。

材と体制を持ち得ているかという点
で、疑問を抱えています。事故に対
する想像力の欠如や慢心を反省しな
がら、自分自身を含めて厳しい目を
向けているところです。

震災後にどう活動したか

ママ、でつながるネットワーク
を使って情報発信

福島第一の事故以降、皆さん
はどのような取り組みに進んで携
わって来ましたか。また、それは何
故ですか。

研究員

事故は一刻も早く収束させ
たいし、福島の皆さんにはなんとも
言い表せない申し訳ない気持ちで一
杯です。ですから、許されるならば
いまずぐにでも福島第一の作業現場
に向いて作業を支援したいという

のが本音です。しかし、私のような技術も知識もない者が、突然、現場に向いても足枷になるだけです。そのような中、一人の原子力人として何ができるか。何をすべきなのかと悩み、考え、子の通う保育園を含めた「ママ」というつながりを通じた放射線に関する情報提供を、メールを使って行うことになりました。メールを書き始めてしばらくは、東京でこのような対応をしているだけでいいのだろうか？と考えたりもしていましたが、そうした私の支えになったのは福島県浪江町で事故の前月に行った放射線に関する講演を聞きにいらしていた方からのメールでもありました。私は自分の子を含めた家族を大切にしながら、しかし、一原子力人としての責任を果たすことにしようと決めたのです。実際、周りには、春休みに重なる時期でもあつ

想像よりもかなり低かった。大いに反省すべき点です。

今回の事故を契機に、放射線の知識は広まっても不安の解消までには繋がらなかった。実家の親と電話で話すとそのことを実感します。放射線に対して漠然とした不安を抱えている人たちに、原子力の安全対策に耳を傾けてもらうのはかなり至難です。しかし、客観的な数値などを示しつつ、自分の周囲から草の根的に説明をし続ける努力がさらに必要だとしみじみ感じます。

全国環境放射線のモニタリング ボランティアに参加

講師 事故から一週間あまり経った頃でしょうか。ある大学の先生から、全国各地の環境放射線をモニタリングするボランティア活動を立ち上げるので、発起人の一人になってほし

たことから、子供を連れて実家に避難しなければならぬのではないかと避妊しないといけないのは、子よりも仕事を大切に思っているからではないかと心配している方、時には親から責められている方も少なくなく、「ママ」として知りあつた私からの情報だからと信じていることができた、行動を決めることができたという方もいらしたようです。事故前までは、「女性」だとか「ママ」であることを売りにして仕事をするにとっても抵抗がありました。そうした情報発信を通じ、今は「女性」であること、「ママ」であることを前提にして仕事をすることにも厭わなくなりました。

浸透度が低かった放射線の理解 活動

技師 私の職場では、福島第一の事

いと要請されました。放射線測定の実務経験のある大学教授などが、福島第一事故後の環境放射線をモニタリングする活動で、私は測定員の一人として、そしてその事務局として参加しました。3月下旬から5月末にかけて実施され、全国の150人もの方々が参加して下さって、とても有意義な活動になったと思います。

例えば、放射線量のホットスポットをデータの裏付けることにも貢献できました。4月中旬頃からは、私たちのモニタリング活動でも、千葉の流山や柏、東京葛飾区の金町など一部の地域で高い線量が測定されました。当初は、モニタリングするボランティアの方から、測定器の不具合を疑う問い合わせもありました。また、そうしたデータを公表すると、困惑されたその地域の方から質問も寄せられました。「確かに平

故収束対応に従事している人が大勢います。私も上司に、収束対応への参加を希望しました。しかし、収束の情報や知見を水平展開することも重要な仕事だと言われました。以来、他のプラントへの水平展開に関する仕事を続けています。

職場は茨城県内で、距離的には福島に近い。実家の親たちは、高い放射線量の中で私が働いているのではないかと心配しています。水道水の残留放射能が世間で騒がれた時期には、親ばかりでなく親戚中が箱詰めのミネラルウォーターを宅送してくれたり少し過剰でした。

考えてみれば、それが一般の人たちの理解度なのでしょうね。放射線に対する理解活動は福島で事故が起きる前から、我々も含め原子力関係者が熱心に行っていました。しかし、その浸透度は残念ながら我々の

常時より値は高いが健康に害を及ぼすものではない」というお答えをしましたが、納得してもらえたかどうかは分かりません。

一般の人にリスクリテラシーを レクチャー

主任技師 日本人は、得てしてリスクへの向き合い方が希薄です。3.11ではそれが一つの教訓になったのではないのでしょうか。私は、一般人たちが今回の震災で社会的リスクに敏感になって、いる時期だからこそ、リスクリテラシーの向上を訴える絶好の機会だと考えました。

放射線の理解活動は大切ですが、たとえそれが広く進んだとしても、放射線リスク自体は消滅しません。必要なのは、放射線リスクに対する社会的な対策と管理のあり方です。また「リスク」は放射線ばかりでな



WiN-Global in Bulgaria 全員集合

を現地でも知りました。当然、メルトダウンとの関連で質疑を受けることも予想され、公式発表の内容に沿っていかに正確に説明するかに苦心しました。

講師 「フクシマ」の実情を迅速かつ正確に伝え、各国メンバーの疑問や質問に真摯に答えることだけに専念した大会でした。

広報担当 現地でブルガリア国営テレビにWiN-Japan会長が生出演した際も、

情報隠しを疑われるなど相当にシビアな質問の連続で緊張しました。その頃、海外のメディアでは、日本が意図的に情報を操作していると報道していただけに、そのような誤解を解きたいとの思いで必死でした。

感動した海外の仲間達の友情

講師 WiN-Globalの場でもIAEAの場でも、「フクシマ」という言葉が、TMIやチェルノブイリと同義で扱われており、改めて事故の深刻さを受け止めました。

そうした中でありがたいのは、WiN-Globalのメンバー達の意欲的な活動です。福島第一の正確な情報を、自国の政府やマスコミ、産業界に進んで発信し続けてくれたのです。メンバーによつては、自ら講演会や討論会を主催し、「フクシマ」の実情を的確に伝える努力

く、食品分野でも交通分野でもほかの多くに存在します。そうした社会のリスクリテラシーを広く捉えながら、放射線リスクやその知識を深めることが必要です。

そこで震災直後から、大学生を対象にレクチャーを始め、さらに一般人へ拡げていく活動を続けてきました。ただし、「リスク」は理論立てた説明だけではなかなか納得してもらえません。感覚的に捉えられがちな面を克服していくところにレクチャーの難しさがあります。

WiN-Japanの活動

WiN-Globalで「フクシマ」を報告

メーカー広報担当者(以下、広報担当) 昨年(2011年)6月には、

WiN-Global年次大会がブルガリアで行われ、WiN-Japanの一員として参加しました。



ブルガリア国営放送朝のニュースに出演する小川会長

講師 この年次大会では日本から「フクシマ」の状況を報告する必要がありました。発災後の対応に忙殺され続けていた電力会社などに所属する会員は参加することができませんでしたが、出席できる会員が協力してWiN-GlobalさらにはIAEAの特別セッションに対応し

ました。

海外メディアからのシビアな質問に緊張

広報担当 現地でのプレゼンに当たっては、情報開示にタイムラグが生じないよう、また会場からの質疑に的確に答えられるよう、直前まで情報収集や打ち合わせが必要でした。例えば、福島第一1号機で炉心溶融の事実が国内で公表されたこと



ブルガリア大会の参加者が心を込めて折る

をしてきていました。また、大会会場では「フクシマのために役立てて欲しい」と募金をしてくれたり、慣れない手つきながら祈りを込めて鶴を折ってくれたりしました。彼女らの熱い気持ちに触れると、日本人として涙が出ます。

現在の憂慮

チェルノブイリ事故との違いを語る必要性

——現在の問題を皆さんはどのようにつえていますか。放射能に対する風評被害も深刻ですが。

研究員 そもそも「風評被害」という言葉でくくってしまうこと自体がよくないと思っています。その対象となっている行為の多くは、子供を守りたい母親たちが起こしている

ます。風評被害を批難すべき前にもっとしておくべき事がある。正確な情報の提供方法もその一つです。例えば、私からの放射線情報はママの立場から「我が子を守りたい」というスタンスを鮮明にしつつ、何をどうしたら良いかという具体的な行動を示したために、ママたちに受け入れやすかったのではないかと考えています。また、チェルノブイリの事故とフクシマの事故との違いが明確に語られていないことも大きな問題に感じています。一般の人たちが、福島第一事故以降の放射能汚染の影響を漠然と恐れてしまう背景に、チェルノブイリ事故が大きく関係しているのではないのでしょうか。

チェルノブイリと福島では、事故そのものも事故後の対応も、国の対応も地形も、とにかく異なることが多々あります。それらを明確に伝える

る必要があると考えます。
現在、お店で売られる福島産を避けている方は少なくないのが実状ですが、流通しているものはそれなりの検査がされており、それらを使った食事をしても問題がない。さらに、その子供たちが大人になった頃の福島は、土壌汚染の度合いも大きく変わっており、生産物における問題はほとんど起きないでしょう。いま、子供に「福島物は危ない」という先入観を植え付けることは、すなわち差別を生むことに繋がるのです。このようなことも含めた警句を含んだ正しい情報を提供し続ける必要性を感じています。

私は、我が子も守りたいし、福島の人たちも守りたい。しかし、現実の問題として、世の中に伝えきれていないものが実に多く、そこに歯がゆさを感じて仕方ありません。

講師 食品中の放射性物質に対する規制値については、小さな子供も食べることを考慮した上で、ICRP（国際放射線防護委員会）が勧告を出しています。そういった科学的根拠の存在や意味合いについて、私たちもつと世の中に「届く」情報発信をしていかなければなりませんね。

事故を教訓に変わった安全設計思想

技師 私の場合には、原子力の設計においては、安全対策の「やり過ぎ」はないという考えを徹底するよ

うになりました。千年に一度の確率が多いか少ないかではなく、その可能性があるのなら、予測される被害から設備を守る想像力をどこまでも発揮すべきです。そして、事故が起きたことは残念ですが、この教訓を今後の新しい安全設計思想へと転換していく機会にもすべきです。当社の場合には全員がその認識に変わったのではないのでしょうか。
また今後、貞観地震のような安全に対する新たな知見は、スピード感をもって設計に反映する風土が業界全体に必要なと思います。今回の事

故は、津波被害に対する新しい知見が業界全体で共通認識される前に起きてしまった。その辺りは大きな教訓にするべきです。
電力不足が招く経済的ダメージが心配
広報担当 震災後は電力不足が深刻です。まさに、あり得ないことが起きている。世界に冠たる経済大国である日本のしかも首都圏で、震災直後に計画停電がなされた時には愕然としました。一市民として、国の経済は豊かであり続けてほしい。しか

ビジネス中国語検定

中国政府教育部実施
中国語版「TOEIC」
BCT検定
(ビジネス中国語検定)
YCT検定
(青少年中国語検定)

〈試験日程〉

BCT試験
春試験 (第14回)
4月14日(土)
受付期間
1月21日～3月3日必着

夏試験 (第15回)
6月9日(土)
受付期間
3月17日～4月28日必着

秋試験 (第16回)
9月22日(土)
受付期間
6月30日～8月11日必着

冬試験 (第17回)
11月10日(土)

YCT試験
春試験 (第10回)
5月26日(土)
受付期間
3月1日～4月12日必着

冬試験 (第11回)
11月10日(土)
受付期間
8月25日～9月29日必着

問い合わせ
日本BCT/YCT事務局
(セリングビジョン(株)内)
〒105-0003 東京都港区西
新橋1の9の1
(プロドリ-西新橋ビル8F)
電話: 03-5251-3101
FAX: 03-5251-6020
URL: <http://www.bct-jp.com>



プリピャチ（かつての発電所勤務者の街。発電所から3km）にあるホテルの屋上からチェルノブイリ発電所方面

し、電力不足が長期化すれば、やがて日本経済は3・11を境に凋落していくのではないかと。その現実を見るのが怖くて仕方ありません。

いまの原子力技術を次世代に残せないならば、日本の経済力は間違いなく衰退していきます。原子力発電はリスクがあるからという気持ちはわかります。安心で環境にやさしいエネルギーだけを選んで生きたいという考え方もあるでしょう。しかし、経済力が弱体化し、海外から物を買うことができなくなる可能性についても考える必要があると思います。次の時代を担う子どもたちには、自分たちが受けた以上の恩恵を与えたい。そう思いませんか。

講師 私の住む地域も今冬は電力不足に陥ります。3・11の被災地からは遠く離れた地域ですが、人々は電力不足を通じて震災の影響を深く受

け止めることになりそうです。

原子力以外のエネルギーで、国が豊かになれるのなら、管理や廃止措置が面倒な原子力利用に必死にならなくて済む。それがないから、我々原子力に携わる者は、志を篤くしながら努力しているのです。国の経済や人々の生活を支えようと、汗を流しているのです。

悲しいのは3・11以降、原子力や電力に携わる人たちが悪の権化のように決めつけて論じる風潮があることです。発電所勤務の経験があり、電力会社に知人も多い私としては、とてもやるせない切なくなります。

研究員 電力不足の問題ですが、私はその深刻さと共に、「電力バブル」に浴していたことに気が付く良い機会でもあると思っています。これもでも節電の大切さは認識していましたが。しかし、中途半端と言います

か、切羽つまっていなかったのです。これからの時代はそうした生活者の意識が大きく変わるのでないでしょうか。この夏、我が子が通う保育園でも省エネの出張教育が行われ、ちょっと驚きました。

福島復興のために

ベラルーシ・ウクライナ福島調査団に参加

——話題を少々変えまして、福島復興への皆さんの気持ちを話しいただけませんか。そういえば、昨秋の「ベラルーシ・ウクライナ福島調査団」に参加された方もいるとか。

研究員 私が参加しました。チェルノブイリ事故の当時、中学生だったので事故についても詳しく知らなかったのですが、まず行く前にチェルノ

ブイリの事故とは何かの勉強から始めたのですが、最初に驚いたのは、事故を起こした4号炉と同じ敷地にある1号炉と3号炉が電力不足に対する懸念から事故後も稼働していたという事実です。国民性や体制、国家のあり方など、この2つの事故の背景には多くの違いが潜んでいると感じました。

ベラルーシとウクライナの現地調査では、糧になったことも多くありましたが、逆に悩みを深めてしまうこともありました。とくに除染については、現地での手法が大胆すぎて、福島にはとても適用できそうにありません。家の除染は壊して埋めるといったものだったようです。現地の担当者は、ソ連崩壊の一因は除染にあると説明していました。

しかし一方では、福島に何を伝えるべきかが私自身の中で鮮明になりました。

た。先ほど話したように、今後はチェルノブイリの事故と福島事故との違いを明確にすることが必要です。また、ある面では福島の方々にも腹を括っていたかなければならないところもあると思います。福島の方々に、差別を受けてしまうような場に遭遇しても耐えうる強さを備えていることを意識した教育が望まれます。そうしたさまざまな必要とされるものについてイメージを具体的に考えられるようになりました。

——ベラルーシでは内部被ばく線量の低減に、地域ぐるみで取り組み、成果を上げた例もあるそうですね。

研究員 内部被ばくは、食への意識を高めることにより線量低下に向けたコントロールがある程度可能です。ベラルーシやウクライナでは、そのための教育カリキュラムを学校の授業に組み込んだりしています



チェルノブイリ市内の25周年公園
にある記念碑

た。福島でも今後、そうした取り組みを参考にした試みを始めようとの動きがあると聞いています。

南相馬での除染ボランティア

広報担当 私は、南相馬での除染ボランティアに参加しました。福島の復興のために、これからも機会あるごとに参加するつもりです。

——ボランティアではどのような作業をしたのですか。

広報担当 住宅周辺の表土を取り除き、一か所にかき集めてビニールシートで覆う作業に携わりました。

の線量が半分になるのは30年よりもずっと短くなります。山間部など表土の剥ぎ取り作業が困難な場所では、除染の可否を論ずるよりも、防災を優先するべき場合もあります。放射性物質とのつきあい方は、それぞれの場所です。それぞれの違いを明確にした上で、除染すべきところは除染をする。予測マップはとても役立つと思います。

広報担当 WinGlobal in Bulgariaでは、収束に向けてフクシマで働く人たちに応援する意味で参加者から寄付と応援メッセージをいただきました。夏の暑い時でしたので、それで栄養補給剤を購入し、東京電力の方に応援メッセージと共にお渡ししました。

加えて、それとは別にWinCanadaから寄付金をいただきましたので、WinJapanからの

そのお宅にはお年寄りのご夫婦が住んでいました。実は、事故が起こる前は息子さん夫婦と同居していたのですが、福島第一の事故後は息子さん夫婦がお孫さんを連れて他の場所に避難されたそうです。ご主人は、放射線量が下がればまた、もとのように皆で一緒に住みたいと希望されています。

とにかく広いお宅でしたので、除染も大変でしたが、一連の作業を終えると線量は確実に下がっていました。しかし、その周囲にはさらに雄大な自然が広がっています。除染を徹底しようとすれば、途方もない労力がかかりそうでした。

除染も、耕作地の線量低下だけでなく、範囲も限られ、直接的な効果もすぐ表れます。しかし、居住環境そのものを改善していくために、周辺地域の表土をすべて取り除くのは困

支援を添えて福島県内の婦人会にお渡しするとともに、女性活動について何らかのご支援ができないかと考えています。

また、放射線についての理解を深めるための女性交流会を福島県内で開催することも考えています。

今後の活動

科学技術を担う人材の育成を 支援

——今後に向けて皆さんはどのような活動をしていこうとお考えですか。

講師 私は、次代を担う子供たちに、エネルギーのことを自分のこととして考えながら未来を見据えて欲しいと願っています。そのために、エネルギーの問題、環境の問題、多くのことへのベースにある理科や科学に広

難です。除染の徹底は望まれるところでしょうが、その方法は良く吟味するべきだと、現地でボランティア作業をしながらつくづく感じました。

セシウムの環境放射線予測マップが必要

研究員 ベラルーシやウクライナにはあったのですが、日本でもセシウム環境放射線予測マップが必要だと思います。予測マップがあれば、この土地の汚染状況がどのように変わるのか。除染作業した効果がどのように出てくるかがきちんとわかります。

福島に拡散したセシウムは、134と137が半々といわれており、それぞれ半減期は2年と30年です。一般的には、半減期の長い137の30年という数値が取り上げられることが多いですが、セシウム全体で

「プラントエンジニア」予約購読のおすすめ

- 書店でどうぞ——〈毎月27日発行です〉
確実なお求め方法として最寄りの書店へご予約ください。
毎号必ず配達または書店での取り置きができます。
- 直接でも結構です——
当会ホームページ (<http://www.jipm.or.jp>) か
お電話 (03-6409-2705) でお申し込みください。
代金は請求書到着後、銀行振込みでお支払いください。

定価1050円 (本体1000円)

新世代エンジニアのための技術&情報マガジン

プラントエンジニア

【発行】 社団法人日本プラントメンテナンス協会
【発売】 株式会社JIPMソリューション
発行人 鈴置 智
編集人 村上 透

〒108-0074 東京都港区高輪3-26-33 (品川ビル8階)
TEL 03-6409-2705 (JIPM代表)
FAX 03-6409-2710 (JIPM代表)
MAIL:center@jipm.or.jp (JIPM代表)
TEL 03-6409-0353 (JIPM-S広告)

■編集企画にみなさんのご意見をお寄せください。投稿も歓迎します。新製品・新技術に関する情報などもお待ちしております。上記JIPM代表宛にお送りください。

興味を持ち続けてもらおう、そんな活動をしていきたいです。関わった子供たちの中から、エネルギーの抱える問題を技術面で解決してやろうと志を燃やす子が出てくれば嬉しいです。この国には資源はありませんが、そういう人材が宝ですね。

国民的なりスクリテラシーの啓発活動

主任技師 やはり、リスクリテラシーの向上です。怖いのは放射線だけではありません。もし仮に、日本が原子力利用から撤退して他の電源でエネルギーを代替するとしてもう。そうなれば、医療放射線はともかく、原子力発電の放射線リスクから我々は開放されるでしょう。しかし、次には原子力とは異なる新たなリスクに取り囲まれます。例えば、資源外交に失敗して化石燃料が輸入

く、国の社会制度の維持、国の経済活動、生活者の利便などを鑑みて、エネルギーの必要量とその合理的な供給方法を考えながら、原子力の存否を冷静に時間をかけて論じるべきではないでしょうか。

また、その際に重要なのは、原子力は事故によって多くの人の生活を奪い、差別を生む技術だという視点です。他の発電技術では、事故が起きても広い地域の人々の生活を奪ったり差別を生むことはありません。そうした視点を今後のエネルギーを検討する場ではより重要視すべきと考えています。

主任技師 福島第一の事故で死者が出なかったのは奇跡だと称賛する声もあります。しかし、そうした言い回しは、専門家の間では兎も角、一般の人の間では誤解を生みます。やはり、説明の仕方としては、事故原

できず、大停電が長時間発生すれば弱者を中心に多くの死者が出る可能性があります。つまり、何かを選択すれば、他の何かのリスクを抱えるわけで、社会安全を実現させるためには、常にリスクの存在と向き合い、対処のあり方を徹底して考え続けなければならぬのです。そうしたリスクリテラシーが国民的に広く根づくような活動をWIN-Japanの「女性交流会」や「女子学生を対象にしたセミナー」などを手始めとしながら拡げていくつもりです。

原子力の議論が冷静にできる状況づくり

技師 2011年の夏は、政府の緊急節電の要請に呼応して、私の職場でも休日シフトが敷かれました。しかし、お客さまの勤務日とのずれが生じてしまつて、仕事が中断するこ

因や発生した事象を客観的かつ科学的に述べていくべきです。世の中の人がそれを理解し、原子力を冷静に見つめる状況になった時に、はじめて今後の議論に移るべきです。時間はかかるでしょうが、そうしたプロセスは疎かにできません。

原子力の分野に必要な女性の視点

主任技師 福島第一の事故が収束し、事故調査が終了すれば、次のステップは原子力の安全再構築が国家的課題になっていくはずですが、その際には、女性もつ能力や感性を従来以上に原子力安全のための設計思想や管理思想に活用すべきです。

これまで原子力の技術部門には女性の数が圧倒的に少なく、その視点が欠けていたと言っても過言でありません。世の中には男性と女性がお

ともたびたびでした。きっと会社の生産性に少なからず影響があったはずですが、自分の会社の事情もさることながら、こうした状況が日常化した時に、果たしてこの国の経済は立ちゆくのか心配になります。多くの人も同様に心配や不安を抱いているのではないのでしょうか。

しかし、一方では原子力のあり方を感情的に論じて止みません。そうした議論が蔓延する限り、この国は3.11のダメージを克服できないと思います。それだけに、原子力の議論を少しでも冷静にできる状況づくりのお手伝いをしていきたいと考えています。

原子力の存否は時間をかけて論じるべき

研究員 いまは原子力の是非を、脱原子力や縮原子力から論じるばかりになっていきます。しかしそうではな

り、人間社会は男性と女性が半々で構成されているわけです。ものの安全性は中庸な思想や発想で考えていくことが重要で、その点から言えば、女性の能力や感性を決して無視できないはずですが、そして今後は、女性の力を発揮できる場を大いに拡げていくべきです。

広報担当 WIN-Japanは、原子力の仕事をする女性のネットワークです。日本国内だけでなく世界中に張り巡らされたWINのネットワークが、福島事故による放射線の不安解消や原子力の安全性向上に役立つよう、私たちも努力を続けたいと思います。

——原子力分野の仕事は難問山積ですが、ぜひ、皆さんの力で支えていってほしいと思います。本日は、長時間にわたりお話しをいただきありがとうございます。